

宇都宮市埋蔵文化財報告 第1集(再版)

牛 塚 古 墳

昭和 59 年 10 月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

序 文

雀宮牛塚古墳（宇都宮市新富町所在）の調査報告書を再版いたしましたのでお届けいたします。

現在、牛塚古墳が所在した地点には、古墳の痕跡すら認めることができませんが同墳からかつて画文帯神獣鏡のほか4面の鏡が出土しており、全国的に著名な古墳であるとの観点から牛塚の所在地は「宇都宮市埋蔵文化財包蔵地台帳」に遺跡番号221として登録しております。

本書は、15年前(昭和44年)に牛塚の墳形を図上復元する目的で発掘調査をした調査結果をまとめた報告書ですが、発刊後今日に至るまで、多くの研究者をはじめとする関係者及び関係機関から報告書を入手したいとの要望がありましたので、ここに再版し発行する運びになりました。

これも、調査の担当者であり本書の執筆者である大和久震平先生をはじめとした関係各位の御努力によるものであり、再版にあたりあらためてお礼申し上げます。

なお、本書は宇都宮市埋蔵文化財調査報告書の第1集であり、本市にとって記念すべき報告書といえます。

ぜひ、研究者をはじめとする多くの人々に御活用いただけることを願いたします。

昭和59年10月

宇都宮市教育委員会

教育長 後 藤 一 雄

再 刊 に よ せ て

山武考古学研究所調査研究室長 大和久震平

宇都宮市教育委員会から「雀宮牛塚古墳」再刊のご連絡を頂戴した時、正直なところ、困ったことになったと思った。あの本の不備を、書いた本人がよく承知しているからである。

不備の原因は私自身の力量不足が第一で、副次的な要素としては、極めて少額な印刷費、整理期間の極端な不足があげられる。遺物そのものは、明治時代に帝室博物館(現東京国立博物館)に買取られ、表慶館の展示室で見学することができる。ただ、これを図化しようとするとは容易なことではなく、将来の課題になるかと思う。

牛塚古墳の発掘は、厳寒のさ中であつた。4・4半期の国庫補助金をやつの事で交付してもらつたが、国・県・市の費用を合せた発掘費の総額は、今では想像もできない数10万円の単位であつた。発掘に参加した方々には、本当に迷惑をおかけした。もちろん、報告書の印刷費も総額の中に入っている。

この程度の発掘が当時の普通の形で、金額も並のものであつた。費用が100万円単位になるのはもう少しあとのこと、国の事業についても、原因者負担の原則がまだ定着していなかつた。発掘は研究者や学生の奉仕活動と考えられており、これが通用した古き時代でもあつた。

牛塚古墳は少々形の変つた前方後円墳で、副葬品もかなり際立っている。墳形を追い、鏡や馬具を追つて、かなり遠くまで出かけた記憶がある。

再刊されたこの報告書が、後進の捨て石程度に役立ってくれば、望外の幸せというべきであらう。

当時若かつた参加の方々も、いまは各分野の中堅として、活躍されていることと思う。ご健闘を祈念して、序に代える次第である。

昭和59年10月

牛塚古墳周辺遺跡分布図

(白ヌキは消滅した古墳)



- | | | | |
|------------|--------------|--------------|-------------|
| 1 塚山古墳群 | 12 陽南市場南遺跡 | 23 並木遺跡 | 34 牛塚東遺跡 |
| 2 幕田古墳群 | 13 一向寺別院付近遺跡 | 24 赤岩遺跡 | 35 宇都宮機器南遺跡 |
| 3 針ヶ谷新田古墳群 | 14 留西遺跡 | 25 島の前遺跡 | 36 権現山北遺跡 |
| 4 針ヶ谷二子塚古墳 | 15 若松原遺跡 | 26 三ツ矢遺跡 | 37 北原遺跡 |
| 5 十里木古墳 | 16 二軒屋遺跡 | 27 石川坪遺跡 | 38 西の前遺跡 |
| 6 綾女塚古墳 | 17 西原北遺跡 | 28 富士見向山遺跡 | 39 前畑遺跡 |
| 7 牛塚古墳 | 18 上坪遺跡 | 29 富士見団地北遺跡 | 40 小蓋遺跡 |
| 8 多功神塚古墳群 | 19 上坪新田遺跡 | 30 赤土山遺跡 | 41 愛宕塚横遺跡 |
| 9 権現山古墳 | 20 熊野神社南遺跡 | 31 天狗原雀宮中前遺跡 | 42 江面遺跡 |
| 10 大日塚古墳 | 21 立海道遺跡 | 32 雀宮東浦遺跡 | |
| 11 愛宕塚古墳 | 22 見明遺跡 | 33 雀宮駅東遺跡 | |

雀宮牛塚古墳

昭和44年3月

宇都宮市教育委員会

序

昭和44年1月10日から同月20日まで、当教育委員会において、牛塚古墳を発掘いたしましたところ、古墳の全ぼうが明らかになり、貴重な資料が数多くえられ、ここに牛塚古墳発掘報告書を刊行することができますことは、誠に喜びに堪えないところであります。

この発掘にあたり、終始ご指導とご協力をいただいた、県教育委員会文化財保護課の大和久先生をはじめ、市文化財調査員の諸先生および土地所有者の山崎氏、地元青年団の方々に対しましても、本書刊行に際しあらためてお礼を申しあげる次第であります。

なお、これを機会に郷土愛ならびに文化財保護の目的がいささかでも達成されるよう、期待するものであります。

昭和44年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 立 入 隼 入

例 言

- 1 本書は栃木県宇都宮市新富町に所在する牛塚古墳の発掘調査報告書である。牛塚古墳出土の遺物は、熊本県玉名郡江田村江田船山古墳はじめ9基の古墳と同範の漢式鏡をもつことで世に知られ、雀宮町牛塚古墳の名称で長く親しまれてきた。市町村合併により雀宮町は宇都宮市に編入され、同古墳の所在町名は変更になったが、本書では歴史的な名称を重んじて、表題を定めた。
- 2 本古墳の発掘調査主体は宇都宮市教育委員会であり、調査には国及び県の補助をうけた。
- 3 本古墳の発掘担当者は栃木県教育委員会文化財保護課指導主事大和久震平であり、本書の執筆も大和久である。
- 4 本古墳の発掘に際し、雀宮公民館の職員の方々にお世話になった。また、土地所有者山崎雅紀氏に絶大なご援助をいただいた。厚く御礼申し上げる。
- 5 本古墳の発掘関係者はつぎの通りである。

事 務 局

宇都宮市教育委員会社会教育課長 鈴木重毅，係長 檜原貞円，主事 池田富一郎
市文化財調査員

小林友雄，野中退蔵，海老原庄太郎，篠崎正雄，辰己四郎，葭田真斎，大関 博，秋本典夫，
牛久於菟彦，青柳良弘

補 助 員

竹沢 謙，大金宣亮，橋本雅市，杉山尚美，大越 操，山崎芳家，鈴木一男，上野幸男，大島 守，
篠崎貴一，五月女宣夫，山崎一郎，寺内雅治，山口勝好，鈴木信子，柳田初江，山崎キミエ，
山崎節子，寺内千代子，大島昭一，木代昭吾，角田 清，数度幸一，本多公夫，山崎正市，篠
崎和一

測 量

宇都宮市土木課

- 6 明治10年に出土した遺物は、現在東京国立博物館の収蔵品となっている。本書の刊行に際し、同博物館考古課の三木文雄課長，三宅敏之室長，村井崑雄室長，西田守夫氏に多大のご便宜をいただき、且つご教示をうけた。深甚の謝意を捧げる。

目 次

I	牛塚古墳の位置	1
II	発掘調査	4
III	墳形の復元	7
IV	遺物	10
	1 発掘遺物	10
	2 参考遺物	11
V	牛塚古墳の年代と墳形	15
	1 牛塚古墳の年代	15
	2 牛塚古墳の墳形について	17

瞭に残っている。前方後方墳は全国的にみてもまだ100基に満たない発見例で、本県では那須郡小川町、同湯津上村に上、下侍塚古墳、那須八幡塚古墳など6基、足利市矢場川、下都賀郡藤岡町蛭沼に各1基の合計8基が判明していたが、これに新しく茂原愛宕塚古墳が加わるわけである。

牛塚古墳の東方2キロに、県指定の笹塚古墳と東谷小学校の校庭の双子塚古墳がある。笹塚古墳は長軸が100メートルに及ぶ大形の前方後円墳で、前方部の発達がよく中期の古墳とみられている。前方部は西向きである。

双子塚古墳は前方部が校庭のために失われてしまったが、西に前方部を向けた古墳であった。この2つの前方後円墳の周囲には、比較的大きな円墳もみられる東谷古墳群がある。

牛塚古墳はこのように前方後円墳の分布地帯の中の1基であり、発掘調査の結果判明した寸法を他の前方後円墳と対比させると、この地帯の中では中等位の規模であることが明らかになった。

発掘調査直前の牛塚古墳は、後円部の後約4分の3を残して、くびれ部、前方部が完全に削平され、またこの部分の周溝も平坦になっていて、後円部の切断面に沿って家が建てられ、西側の周溝の埋められた部分は宅地と道路敷になっていた。

後円部の残った部分も完全でなく、東西、南北に大きなトレンチが掘られたままになっており、残土が封土の東西両側に吐き出してあった。外観はこのように惨憺たる古墳であるが、後円部の周溝だけはよく残っており、殊に北側の周溝はかなり浅くなっていたものの、周溝本来の幅をほとんど残していた。

墳丘の東北側、国鉄東北線を越えた地点に小さな円墳が1基残っていて、付近の畑から土師器、須恵器が出土する。このほか戦前には墳丘の北側と西側に数基の円墳が見られたというが、今は跡かたもない。これらの円墳は牛塚古墳の陪塚と考えてよい位置にある。

牛塚古墳は文政7年(1824年)3月に一度発掘されたようで、出土遺物が図となって残っているという。清野謙次博士がこの事に短かく触れておられるが(注1)、原典は発見できなかった。

明治10年(1877年)になって、道路修築のおり再び発掘されて、現在国立博物館に納められている遺物はこの時に出土した(注2)。この記録によると、発掘に参加した人員850人、日数は2週間余りを要したという。当時の帝室博物館に買上げられた代金が150円とある。

清野博士の記録にある遺物の大要と、下野史談に記録された遺物、及び国立博物館の牛塚古墳出土遺物は、数に若干の出入はあっても大綱に変わりはない。このことからみると、文政7年の発掘で出土した遺物は、そのまま再び古墳に埋納されたと考えてよく、遺物の図だけこの時に作成したものであろう。更に想像を加えるならば、このような先例が水戸光圀の侍塚古墳発掘にあり、この折の遺物を私しない態度と図面の作成は大金重貞による那須記の刊行で知識人に知られ、心ある人によって牛塚古墳も同様に扱われたものと考えられる。

明治10年は文政7年から53年後である。この程度の年月ならば牛塚古墳発掘を見聞した人は存命であり、維新以後の風潮に乗って、案外再発掘のお先き棒をかついだ人間もいたのではないかと思う。ともかくも、遺物買上金の一部の15円で雀宮では消防組が組織されたというから、本人達は

功績をたてたつもりになったかも知れない。

文政7年と明治10年に今回を加えると、牛塚古墳はこの1世紀半の間に3度の発掘をうけたことになる。包含地遺跡ならば、1つの遺跡が何回発掘されようとして気にする必要もないが、古墳の場合は異例といってよい。

今回の発掘調査は墳形の図上復元の資料を得るため実施したものであり、この点では従来判然としていなかった壬生町牛塚型の前方後円墳の抽出に成功したといえよう。これと同時に、発掘事実の上でも、文政7年と明治10年の発掘を跡づけることができた。

Ⅱ 発掘調査

発掘調査は古墳の現状からみて、内部主体及び副葬品の検出には全く期待が持てず、円筒埴輪列等もその存在が危ぶまれたので、調査の目的を墳丘平面形の復元一本にしぼり、日程の前半を前方部の検出に、後半を後円部の調査にあてた。

1 前方部の調査

前方部が南面して築造されたとみられる墳丘は、後円部の南側から削平されていて、くびれ部、前方部及びこの部分の外側にある周溝はその痕跡が全くなく、しかも戦時中軍需工場建設の厄にあつて、地面はすべてレベルになっている。

削平された土地の大部分は家と宅地になり、家屋のほかに各種の小屋や垣根、庭が錯綜して、トレンチの設定は思うにまかせず、またトレンチの拡大も必要最小限度にとどめた。

トレンチの設定は、前方部前縁及び周溝前縁の検出を目的とする南北に長い中央の第1トレンチから開始し、予定の前半期間中と後半期の一部で13本のトレンチを掘り上げ、前方部西南隅角と周溝の西南隅角を確かめる拡張部を設けた。

前方部の長さは後円部の残存部分及びこの部分の周溝に比較して、著しく短いことが判明した。また地形が東下りでもなく、基盤層であるローム層の上面もほぼ水平であるのにかかわらず、ロームに掘り込まれた周溝は東側が深く、西側が浅く掘られている。

この現象は前方部前面の周溝が東西で著しい対称をなす。周溝の前縁東南隅角付近では、周溝の掘り込みがロームの上面から55～65センチ、表土上面からでは80～90センチに及ぶが(第3図3)同西南隅角付近の掘り込みはローム上面から35～40センチ、周溝の前縁部ではローム上面から35センチの掘り込みである(第3図7)。同じように前方部東側の周溝では、ローム上面から約60センチほど掘り込まれている(第3図5)。

前方部の築土はすべて失われており、結局ロームに掘り込まれた周溝の内縁で位置を決定するほかはなかった。前方部前縁は一応全部検出できたが、崩壊の部分があつてやや湾曲し、東南隅角は削られていて、この部分は側面と前縁の線から推定の点を求めた。このようにして求められた前方部前縁の幅は凡そ17.7メートル強である。

周溝の前縁は、1、5、7、8トレンチの落ち込みを連ねると弱い弧状をなすことが分つた。この湾曲を無視して、前縁の両隅角から直線の距離を測ると凡そ35.5メートルとなり、前方部前縁のほぼ2倍の長さである。

前方部封土両側の検出は庭の植込みや私道をさけて東側に4トレンチ、西側に14、15、16トレンチを設けて調査した。国鉄東北線の鉄道敷に接した東側はすべての点で保存がよく、4トレンチで

前方部の側面と周溝が検出できた。西側に軍需工場の建物跡のためか掘り込みが多く、これに円筒埴輪やガラス、石炭が投げ込まれていて側面の線は明確にならなかった。

前方部西南隅角から側面にのびる線と、西側に設けられたトレンチでは側面の方向が一致せず、隅角からの線を追おうとしても、植込みと私道に阻まれてトレンチを設けることができなかった。従って前方部西側の側面の線は、東側面の線を前方部前縁の midpoint から求められた封土の中軸線から折り返すほかに方法がなかった。

前方部の大体の位置と、周溝の関係が明かになるにつれて、墳丘の片寄りが判然としてきた。簡単にいえば、前方部の西と東では周溝の幅が異なり、前方部前縁の線と周溝前縁の線が平行の関係にならないというわけで、周溝に対して封土がゆがんだ位置にあると判明したわけである。

前方部東南隅角から周溝東縁までの距離が7.4メートル、同西南隅角から周溝西縁までの距離が12.1メートルで、西側が東側よりも4.7メートルほど長くなっている。即ち前方部が東にゆがんだ形で作られていたわけである。

周溝トレンチのうち6, 9, 13トレンチでは、周溝の外側に幅50~60センチ、深さ15センチほどの溝が発見された。周溝の外側は周庭帯になるので、この関係の遺構か或いは古墳築造の縄張りの跡かとも考えられるが、同巧のものは前面及び西側の周溝では全く検出されていないので、ここでは溝のあった事実だけを記しておく。

周溝の中からは若干の遺物が出土している。1, 2トレンチでは前方部の前縁に接して円筒埴輪片が発見され、6トレンチでは周溝内に堆積した黒土層の中からは新しい時期の土師器が出土した。1, 8, 9トレンチではそれぞれ1ヵ所ずつ周溝の底面上に炭、灰、獣骨片、貝片がひとかたまりになって発見された。発見の層序が深い位置だけに、何か想像をめぐらしたくなる遺物である。

2 後円部の調査

墳頂が分断されているとはいえ、後円部の裾野から周溝は、外見的にはいかにも原形を保っているかに見えた。前方部検出の困難さに比較すれば、後円部の原形追求は容易に行えるものと当初は考えていた。このため周溝の外縁検出に10トレンチ、墳丘裾部の検出に11, 12トレンチ、墳頂の確認に小トレンチを設けて一気に外形検出の要所を押えにかかった。

周溝の外縁を調査した10トレンチは大体予想した通り、現状で遺存している周溝外縁の線がそのまま周溝本来の外縁であると断定できた。墳丘の裾部に円筒埴輪片が散出するにもかかわらず、一向に姿を現わさなかった。表土にほとんどなく、ロームを混じた築土が厚く重なっていたが、この築土が非常に脆弱でしかも粗い粒状を呈し、極端に言えばボタ山の堆積に似て、掘ればざくざくと崩れ流れる状態であった。これは古墳本来の築土ではないと判断した。墳頂部も全く同じで、粒度の粗い築土がただ重なっているに過ぎなかった。

各トレンチの所見を総合して、墳丘の形をした現状の後円部は、一度破壊した築土を再び盛り上げたものであると考えざるをえなくなった。こうなると時間をかけて測量した等高線も全く無意味であり、これをもとに断面形を作図することも勿論無意味である。残された調査法は、墳丘を基盤層まで大きく切断し、断面観察によって墳丘本来の形を復元するしかなかった。墳丘の南側は垂直に近く切断されて、すぐ下に家がある。調査中に築土が崩壊する危険性もあるのでトレンチは墳丘の中心部に推定される地点を北に外して東西方向の17トレンチを設け、T字形に南北方向の18トレンチを組んで重機械を使用し、墳丘を切断した。

切断の結果事前に考えていた通り、内部主体を推定させる遺構、遺物は全く検出されなかった。墳丘の切断面は第3図1(東-西)、同2(南-北)に示す通りで、最下層はローム、その上は黒色土層で自然層である。牛塚古墳本来の築土はこの上にのった縦線の部分だけで、最も厚く残っていた個所で厚さ1.5メートルに過ぎなかった。この上の土層はすべて古墳を破壊した後に、崩土をもう一度積み重ねたものである。後円部に接する周溝の内縁も、18トレンチの断面が示すように4メートルも埋められて本来の形は崩壊土の下にかくされていた。

切断調査によって検出された後円部の外縁と、東側くびれ部に近い12トレンチで検出した外縁の4点を連ねるとほぼ完全な円形になり、後円部外周は直径33メートルほどの円であると判明した。

周溝は西側に19トレンチを設けて発掘した結果、前方部の場合と同じく東側が狭く、西側に広がっていることが明かになった。

発掘調査で明らかになった墳丘の再築を検討してみると、土の始末の仕方に2通りあることが分る。即ち第1回目は後円部を平坦にするほど削り、その後に再びこの土を盛り上げて墳丘を大体原形にもどした工事で、第2回目は遺物を取るだけの目的で墳丘に十文字の大トレンチを設け、土を墳丘の外に排出したまま放置したもので、この土の状態が第2図の現状実測図になっているわけである。

さきに触れた通り、牛塚古墳が過去2回の発掘を受けているとするならば、第1回目は恐らく文政7年のものであろうし、第2回目は明治10年のものと考えてよさそうである。それにしても文政7年の発掘は非常に大がかりなものであったと思われるが、それにもまして墳丘を原形にもどす作業は発掘以上に大変な仕事であったと考えてよい。

Ⅲ 墳形の復元

墳形の立体的な復元については、前方部の資料が皆無であり、後円部も再築であることが判明したため資料がない。従ってこの作業は平面形の復元のみにとどめる。

はじめに発掘によって得られた資料から現状での復元を行い、ついで墳丘と周溝とのずれを問題にして、牛塚古墳もとの設計図、即ち本来の平面企画を推定してみたい。牛塚古墳の造営は土木工事であれば、計画と工事施行のずれと考えるからである。各計測点及び記号は上田宏範氏が発表されているものを準用する(注3)。

1 現状の復元

現状の平面形復元は墳丘と周溝に分けて行う。これはすでに述べた通り両者の間に方向、位置のずれがあり、同一軸の遺構として処理ができないためである。

後円部トレンチによって明確になった墳丘の立上り部4点を円形の上に求めると、ほぼ同一円周上の上のってくる。この場合立上りの点をローム上面とする。これは前方部の計測点がローム上面でしか押えられないため、同一面での計測を原則とするからである。

後円部円周の中心点はOとして求められ、直径CBは凡そ39メートル、CBの6分の1は6.5メートルである。前方部前縁の長さQQ'は凡そ17.7メートルと計算される。このQQ'の中点がDである。前方部東側面の長さQC₁は、2トレンチの側面の線と4トレンチ側面の線を連ねたもので、QC₁の延長は、前方部前縁の中点Dと後円部円周中心点Oを連ねた墳丘中軸線DBの北の延長点Aと重なる。普通の形の前方後円墳であれば、QC₁の延長は後円部円周上の点Bに交わるが牛塚古墳ではAに重なるわけである。前方部西側面Q'C₂はQ'点に残っている側面の線を基準に、長軸線BDからC₁を折り返した点である。

以上の操作により、墳丘の平面形は下記のように復元される。

長軸 BD = 56.7メートル
後円部径 BC = 39メートル
前方部長 DC = 17.7メートル
前方部幅 QQ' = 17.7メートル

つぎに周溝の復元形であるが、後円部周溝の外縁は同一円周上にのらず、後円部の中心点Oを中心とした同心円にはならない。点Oで長軸と直角の方向の周溝外縁径を測ると69.4メートルである。前方後円墳の周溝平面形は逆盾形を呈する場合が多いが、牛塚古墳の周溝は帆立貝形をとる。第2図で円点を入れた部分が周溝の底面である。

周溝のくびれ部である東側の6トレンチでは、周溝の外縁と底面の間の法が長い。西側8トレン

チの周溝外縁の線を考慮に入れて、周溝くびれ部の復元は第2図の通りに推定した。

周溝平面形の計測値は下記の通りである。

$$\text{全長 } AE' = 77.4 \text{メートル}$$

$$\text{前面幅 } RR' = 35.4 \text{メートル}$$

以上の通り一応墳丘と周溝の平面形は図の通り求められたが、墳丘は周溝の東に片寄っており、しかも両者の長軸は3度半ほどくい違いになっている。墳丘の軸が東に寄っているわけである。

ところでこの古墳の築造について、平面形の企画があったことは、各点の計測結果からかなりはっきりと指摘できる。即ち

$$\text{前方部前縁長 } QQ' = \text{前方部長 } CD$$

$$\text{周溝前縁長 } RR' \text{ の } \frac{1}{2} = QQ' = CD$$

などであり、後円部直径 BC の $\frac{1}{2} = 6.5$ メートルは、前方部周溝幅 DE' の6.5と一致する。

このように若干の点では平面形の企画性が指摘できるにしても、その他の主要部分については、計測各点の相関性が十分に説明できない。特に墳丘と周溝との間にみられる平面形のずれは、古墳造営当初の企画の時点からこのような形で平面形が算出されたものではあるまい。従って私共としては、どこかの計測値を基礎にして、牛塚古墳の当初の平面形を推定復元する必要があるわけである。以下の項はこのことについての一つの試論である。

2 推定の復元

推定復元の手がかりは、牛塚古墳が他の前方後円墳と異なり、前方部、周溝を含めたすべてが、後円部墳丘を中心にした同心円上に位置するのではないかという考え方に立脚している。そして復元の基礎になる数値としては、前方部前縁幅が前方部周溝前縁幅の約2分の1に等しく、前方部の長さも等しいという計測結果を重視し、これらに共通する17.7メートルを念頭においた。

前方部前縁の midpoint D、19トレンチ周溝外縁、後円部周溝の外縁点 A、及び18トレンチ周溝外縁の4点は同一円周上にあり、この円周の中心点は O' である。円周の半径 AO' は35.4メートルで、17.7メートルの2倍になり、AO' の延長点は、周溝前縁 RR' の中点 E₁ に直角に交わる。このことは牛塚古墳の周溝が当初の平面企画を比較的忠実に守っていることを示し、逆に墳丘の築造が企画と異なる形に仕上げられてしまったものとみなしてよい。そして平面企画の中心は O' であり、墳丘、周溝を通ずる長軸は AE₁ であると考えてよい。

つぎに墳丘の復元であるが、前方部前縁幅17.7メートルを当初企画の長さとする、前方部の長さ17.7メートルにもやはり当初の企画性を認めなければならない。長軸 AE₁ 上に前方部の長さを仮設すると、点は前方部前縁の midpoint が D'、後円部と前方部の理論上の交点 C' となる。こうすると円周の中心点 O' と C' の長さが、後円部の半径を示すことになる。この長さも17.7メートルであり O' を中心に半径17.7メートルで求められた円が後円部の推定復元形である。直径 B'C' はいうま

でもなく17.7メートルの2倍の35.4メートルで、この長さはO'を中心としたさきほどの円の直径に等しく、また前方部周溝前縁の長さに等しい。

前方部の形はD'を中点にして17.7メートルをとり、これと後円部周溝の外縁点Aを結んだQ₁、Q₂、及びこの両線が後円部円周と交わった東西2点で求められる。細い斜線の範囲が、このような操作で求められた推定の墳丘平面形である。

前方部の両隅角Q₁、Q₂と、前方部周溝隅角R、R'を結ぶと、この交点は長軸AE₁に点Pとして合致する。この点Pを前方部の墳頂と考えてよい。

上田宏範氏は前方後円墳各部の比率を数化する原則に、後円部直径を6とする方法を示しておられる(注4)。別の表現をすれば、後円部の直径の6分の1の長さが平面企画の基礎的数値ということになる。牛塚古墳の推定復元形では後円部の直径(B'C')が35.4メートルであるから、この6分の1は5.9メートルになる。5.9メートルをαとして、推定復元をした当初の平面形の各部の比率を確かめてみよう。

後円部直径(B'C') 35.4メートル = 6α	後円部周溝幅(AB') 17.7メートル = 3α
前方部幅(Q ₁ Q ₂) 17.7メートル = 3α	前方部周溝幅(D'E ₁) 5.9メートル = 1α
前方部長さ(C'D') 17.7メートル = 3α	周溝円直径(AD') 70.8メートル = 12α

以上により、当初の平面企画と推定復元した牛塚古墳の各部の長さは、基準寸法である5.7メートルの整数倍になっていることが明かになった。

つぎに同じく上田宏範氏が前方後円墳の比率により古墳の型式分類を行ない、編年の序列を発表しておられるので(注5)、この中での牛塚古墳の位置を求めてみたい。

上田宏範氏は前方後円墳の長軸を後円部直径、前方部後長、前方部前長の3者に分け、後円部直径を6とした比率でA-Eの型式を設定された。

A型 6 : 3 : 1 ~ 6 : 2.5 : 2.5	D型 6 : 2 : 3
B型 6 : 1 : 3	E型 前方部前長が後円部半径を越すもの
C型 6 : 1.5 : 3	

牛塚古墳の推定復元形では、前方部前長(D'P)が5.9メートル、前方部後長が11.8メートル後円部直径が35.4メートルで、後円部直径を6とした比率は、6 : 2 : 1となり、後円部直径と前方部の比率は6 : 3、即ち前方部の長さが後円部直径の2分の1の短かい前方部を有する前方後円墳であることがわかる。そうして6 : 2 : 1という比率は、上田氏の設定した5型式のいずれにも該当しない特異な形の平面形をもつ前方後円墳であることを示している。

前方部の著しく短かい前方後円墳としては、帆立貝式とよばれる古墳がある。牛塚古墳はこの仲間とは若干異なるようであり、且つまた栃木県内にはこの牛塚型の古墳がいくつか存在している。これらについては後の項で触れる。

IV 遺 物

発掘調査で出土した遺物は円筒埴輪片と、周溝の中から発見した土師器のみである。主要な遺物は明治10年の発掘ですべて掘り上げられ、東京国立博物館に収蔵されている。この折に出土した遺物の数と、国立博物館の収蔵品の数に若干の相違があるので、これを一覧表にして示す。

出典は清野謙次博士「日本人種変遷史」、下野史談1の4、栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告2である。

	円鏡	五鈴鏡	四鈴鏡	鈴杏葉	環鈴 <small>(金環)</small>	鉄鍬	短甲片	直刀片	鉄金具	鈴釧	勾玉	管玉	丸玉	耳飾	木片	土器	埴輪	その他
変遷史	2	1	3	1	2					1	15	4	3			3	1	
下野史談	2		5		1	葦		1		2	7	3				4		葦
報告 2	7	1	3	1		葦		1		1	7	3	葦			4	残欠	
東博蔵品	2	1	3	3	1	3	4	1	1	1	12	6	5	2	3	3		

遺物は今回の発掘によって発見されたものと、明治10年の出土品をわけ、後者を参考遺物として記述する。

1 発掘遺物

イ 埴輪片 (第4図1, 2)

前方部前縁に続く周溝の斜面と、後円部裾の再築封土の中より発見された。いずれも投げ棄てられた残片である。破片はすべて円筒埴輪で、しかも下胴部ばかりである。第4図1及び2は18センチの墳丘裾部に近い位置で発見された。多くの残片のうちでは比較的まとまった形をしている。

1は底部の外径17センチ、残存部の高さ25.5センチ、幅約2～2.5センチの凸帯が2本めぐっている。

2は底部の外径14.7センチ、残存部の高さ19センチ、幅約2センチの凸帯が1本めぐり、その上部に穴があるが欠損して、穴の直径は不明である。両者とも赤褐色、粗製で外面には縦方向の細い条線が走る。2は底部から9センチの間に粘土紐の積上げ痕を残している。

ロ 土器 (第4図3)

6センチの周溝斜面の堆積土の中から発見されたものである。口縁部の直径11.9センチ、高さ3センチ、器壁の厚さ3ミリで、小形、薄手の土師器坏である。内外面ともクロ目を残し、底部に糸切り痕がある。土師器の編年では最も新しい仲間に入り、恐らく平安期に下るものであろう。本古墳とは直接関係がなく、後世周溝の中に遺棄されたものと考えられる。

2 参 考 遺 物

イ 鏡

画文帯神獸鏡 (図版三一、四一)

一括出土6面の中では最も大きく、鏡径は21.1センチで、背面の文様面に朱が塗沫してある。この鏡はいわゆる漢式鏡で六朝初期の作と考えられ、牛塚例を含めて10面の同范鏡をもつことで古くから知られている。同范鏡出土の古墳は下記の通りである。

熊本県船山古墳、宮崎県持田古墳、同持田24号墳、広島県西酒屋古墳、岡山県茶白山古墳、三重県神前塚古墳、大阪府車塚古墳、福井県丸山古墳、静岡県岡津古墳(注6)。

このうち船山古墳は象眼銘太刀、舶載鏡、冠など多彩な出土遺物をもって知られ、一括国宝に指定されている。

鏡は銅鍔がかなり強く、保存度は船山古墳、岡津古墳の同范鏡に及ばない。内区は鈕の周囲の四等分の位置に小さな環状乳をおき、その外に円座乳を配し、乳を囲んで4獣がおかれ、乳の間に4神が鑄出してある。

神像は段階式とよばれる配置で、鈕の穴とはほぼ45度の位置の一方から見る図柄である。上段の神像は足下の左右に向かい合う2人の座像をもっている。

4つの神像は普通神仙と考えられているが、西田守夫氏は上段の像を伯牙弹琴の姿、中段を西王母、東王父と考えておられる。白牙は当時の中国の鑄物師が信仰した丙午の神格化とされる(注7)。丙午とは小林行雄博士によると、干子の丙と方位の南を意味する午の結合であり、丙は火性の強い文字で、これと午の陽と合することにより、火勢を取り扱う鑄物師にとっては理想の干支となるという(注8)。

上段の神像を伯牙の弹琴とみると、足下に対向する座像は伯牙の琴を謹聴する姿と解した方がよさそうである。この伯牙の解釈は、つぎの銘文の読みとも関係してくる。

内区の外側は半円方形帯とよばれる銘文帯である。各々14個ずつの半円形と方形が交互に並べられる。半円形は素文で研磨され、方形は中が4区画に細分されて、これに1字ずつ合計56文字が鑄出してある。文字の解読は船山古墳などの同范鏡を含めて、人により若干の違いがある。以下解読の例をあげる。…は異なる読みの文字である。

高橋健自博士(考古界7-12) 船山例

吾作明竟 幽鍊三商 配像万疆 競従序道 教奉賢良 周刻典記 百身長楽 衆事主陽
福祿正明 富貴安楽 子孫蕃昌 賢者高顕 士至公郷 与師命長

同じ読みは栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告書の牛塚の項にもあるが、この書物の刊行には高橋健自博士が資料の提供をされておられるので、銘文の読みは同博士のものともみて割愛する。

後藤守一博士(漢式鏡) 船山例

吾作明竟 幽凍三商 配像万疆 競従序道 敬奉賢良 周刻典記 百身長楽 衆事主陽

堅？同光明 富貴安樂 子孫番昌 賢者高顯 土至公卿 与師命長
三木文雄氏（船山古墳とその遺宝）

吾作明竟 幽凍三商 配像万疆 統(カ)徳序道 敬奉賢良 周克無□ 白牙拳樂 衆□主陽
聖徳光明 富貴安樂 子孫番昌 学(カ)者高連 土至公卿 其師命長
西田守夫氏

吾作明竟 幽凍三商 配像万疆 統徳序道 敬奉賢良 □刻無祀(カ) 白牙拳樂 衆□主陽
聖徳光明 富貴安樂 子孫番昌 学者高遷（連） 土至公卿 其師命長

白牙拳樂の白牙は前述の伯牙で、鏡の銘では白が百となっているが、西田氏は白も百も伯の仮借字と解されている。（注9）。

以上のほかに下野史談にも銘文の読解があるが、誤読が多いので割愛した。

外区は画文帯で、通常飛禽走獸文とよばれる。時計回りに走る獸や爬虫類が画かれているが、西田氏はこれを西竜、白虎、朱雀、玄武の四神と、蛇身に引かれる東王父と解しておられる。（注10）。

外区の外側の縁は平縁で、これに菱雲文がめぐっている。

変形獸形鏡（図版三－2，四－2）

面径は17センチ，三角縁の仿製鏡である。内区の4個の円座乳の周囲に，各々半円状の獸形をおく。獸形と獸形の間，神像の顔面に似た文様が鑄出してあるので，神獸鏡のようにも見られるがやはり獸形とみなす方が無難で，この乳間の4獸を加えると8獸になる（注11）。

中区には銘文帯がなく，変形雷文になり，外区は波文と外向の鋸歯文になる。縁は素文である。文様面に平織布の残片が付着している。布は精粗の2通りあるが，糸の種類までは分らない。衣服の一部が付着したものか，布の袋に納めたものか出土状態不明のためなんととも推定できない。

五鈴五獸鏡（図版五－1）

4個の鈴鏡のうち最も大きな鏡で，名称は岡崎敬氏のご教示によった。面径は9.4センチ，内区に円座乳5個をおき，乳を頭部にした形で5個の獸形が鑄出してある。

銘文帯には文字に似せた字形が15個めぐっている。外区は2段の櫛歯文で，これに広い素縁がめぐり，5個の鈴がつく。鈴の径は1.6－1.7センチである。

四鈴鏡（図版五－2，3，4）

同范かどうかは不明であるが，3個とも同形同大の鏡である。面径はいずれも5.8センチで錆化が著しい。内区に乳はなく，文様は不明，外区は櫛歯文で，縁は素文である。鈴4個は対称の位置に付く。鈴の径は1.5－1.6センチである。

口馬具

鈴杏葉（図版六－1，2，3）

3個とも同形同大の青銅製品である。長さは12.7センチ，鈴の径は3.4－3.5センチ，表面の上部は7個，下部に16個の珠文を配し，上端に装着用の孔がある。

この形の杏葉は，小野山節氏のいわれる古墳時代馬具の第2期の特徴的な形態である。本来は剣

菱形杏葉の仲間であり、楕円に剣菱の組合さった形で、鈴はこれに付随するものとみなしてよい(注12)。愛知県志段味古墳、栃木県十二天塚の出土例と同形である(注13)。

環 鈴 (図版七-1)

馬具かどうか異論のある遺物であるが、本例は轡が錆着しているので、馬具ではないにしても近縁関係にあるものとして、一応馬具の項で説明をしておく。

本例は青銅製の三環鈴で、鈴が環に食い込む型式のものである。環の内径は2.3センチ、鈴の横径は5.07-5.22センチ、環の断面形は内外とも菱があってレンズ状を呈する。環鈴は通常5世紀の遺物といわれるが、牛塚の環鈴は石山勲氏の分類によると6世紀型に入る(注14)。なお群馬県観音山古墳では7世紀の遺物と共に環鈴が3個発見されている。(注15)。

轡 (図版七-2)

環鈴にかたく錆着している。破損の部分が多いが、鏡板、銜、引手、立聞の鉤金具が揃い、轡一具は一応全部認められる。

銜は2連式である。0.9センチの丸い鉄棒の先端を環にして結合し、もう一端も環になって引手につらなる。2本とも長さは9.4センチで、2連式であるから銜の両先端の環は90度の角度をなす。

鏡板は2枚とも錆化が著しく、周囲が破損して原形がよく分らない。鉄地金銅張りと思われるが、上面周囲の銜もはつきりしない。2枚のうち1枚は下端がかろうじて残っており、これからみるとf字形鏡板とも考えられる。厚さは2枚とも0.25センチ、大きい方の鏡板の残存部の幅は7.7センチである。

鏡板には下方に銜の通る孔と、上方に立聞の孔があげられている。立聞は普通鏡板の外縁に、方孔をもった凸起として付けられるものであるが、この例では鏡板に直接孔があげられているわけである。立聞には面繫の先端の鉤金具が2個とも残っている。

引手は鏡板の外側で銜の先端の環と結合している。この結合は引手の環と銜の環との間に、長径3.55センチ、太さ0.8センチの素環を入れて結んだものである。引手は途中から折損していて、全長を測ることができない。

ハ 武器 武具

短 甲 片 (図版八-1, 2, 3, 4)

4片あるが最大のものでも幅が17センチにすぎず、他は10センチ以下の小片である。短甲のどの部分に当るかはつきりしない。三角板銜留の甲で、短甲として後出の型式である。裏面には麻布ともみられる平織の布が付着している。

鉄 鎌 (図版八-5, 6, 7)

無茎の平根式が2個、尖根式が1個である。平根式は長さが4センチと4.3センチで、薄い鉄の板である。2本とも鎌身の中央に筥が入っている。尖根式は柄が欠損している。刃部の長さ3.4センチ、諸刃で断面形はレンズ状をなす。

直 刀 柄 (図版八-9)

直刀の柄の残欠品で、長さは20.4センチ、柄頭に近い部分の太さは2.2センチである。刃関の付近から折れ、柄頭はない。恐らく環頭柄頭がつくのではないかと思われる。柄木には太さ1ミリの鉄線柄巻きが刃関から15センチの間にぴっしりと巻きつけてある。類品は埼玉県行田市將軍塚からも出土している。

二 装 身 具

金銅張り耳飾

玦状の鉄環に金銅を張ったもので、楕円形を呈している。2個とも同形同大で、長径は2.4センチである。

勾 玉

12個ある。すべて瑪瑙製で、コの字勾玉に近い。長さ3.1センチのもの1個、2.8センチのもの9個、1.9センチの小形品が2個となっている。

管 玉

6個ある。1個だけは濃緑色の碧玉製であるが、他はうすい灰緑色を呈し、グリーンタフのような感じをうける。長さはいずれも2.5センチ前後であるが、このうちの1本は古式の古墳に間々みかける細形のものである。

丸 玉, 小 玉

濃青色のガラス玉で、直径が6ミリ前後の丸玉が4個、4ミリの小玉が1個である。

鈴 釧 (図版七-3)

青銅製で、細い中空の環に直径1.4センチの鈴がつき、一部が欠損している。環は復元形での外径が6.5センチ前後となり、外周が約20.4センチと計算される。この長さからみて、鈴はもう1個つけられていたものであろう。

ホ 土 器 (第4図4, 5, 6)

須恵器片2個、土師器坏1個である。第4図6は須恵器高杯の杯の部分の破片で、口縁部と銅部の境に段がある。同図5は須恵器甗の口縁部である。

同図4は土師器坏で、土師器の中でも最も新しく、所謂灯明皿に近いものである。発掘遺物の項で記した土師器坏と同様に、本古墳に直接関係する遺物ではない。

へ そ の 他 (図版八-8)

幅3.1センチ、厚さ2ミリ、断面形がかまぼこ形をした鉄地金銅張りの断片がある。上面に2個の鉾があり、幅1.3センチほどの折れた柄がついている。馬具の飾金具でもあろうか。

このほかに木片が3個ある。木質は不明、木棺の残片と考えられる。

V 牛塚古墳の年代と墳形

1 牛塚古墳の年代

各項でのべてきた墳形、内部主体、出土遺物等を勘案し、ここで牛塚古墳の実年代を検討しなければならない。年代の推定に重要な関係をもつ墳形については、特異な形態であるだけに別項で論じてみたい。

まず大づかみな年代幅を考察しよう。発掘調査の結果内部主体は木棺直葬と推定できた。この葬法はこの地方で横穴式石室が普及する6世紀半以降にはあまりみられず、これだけでも或る程度の年代的な幅を考えることができる。一方この古墳から馬具が出土している。馬はいうまでもなく5世紀に大陸から輸入されたもので、牛塚古墳の年代の上限がこれで押えられる。即ち以上の資料から、横穴式石室の普及以前の古墳であるが、4世紀に溯るほど古い古墳ではないという上限の目安がつけられたわけである。

下限の目安は鈴鏡でつけられよう。鈴鏡はもともと東国に多く分布し、小林行雄博士はこれを古墳時代後期の鑄造品と考えておられる(注16)。三木文雄氏は牛塚古墳、足利市助戸十二天塚古墳はじめ多くの鈴鏡と、これに伴う漢式鏡、仿製鏡を対比させて、仿製鏡にあつては文様の硬化や末期的様想から、漢式鏡にあつては製作年代が六朝中期以降に降ることから、馬具の出土を勘案されて、やはり古墳時代後期の色彩が多いとされている(注17)。6世紀以降ということになるわけである。

なお、本古墳出土の画文帯神獸鏡は通常これを六朝時代の鏡とみている。いうまでもなく、政治史的には六朝は晉室の東遷(317年)から隋朝の統一(589年)までを指し、倭の五王の時代は六朝中葉に当たる。後藤守一博士はこの画文帯神獸鏡が、建武5年銘神獸鏡と同じ文様構成であることを指摘しておられる(注18)。

大づかみな年代の把握ができたところで、つぎは個々の遺物の検討にうつる。これには古墳時代後半期の年代判別に欠くことのできない馬具の検討から入るが、このためには先学によってすでに年代の判別が行なわれている重要古墳のうち、牛塚古墳となんらかの形で関連のある古墳の内容を瞥見し、これをまず対比の資料としたい。幸い牛塚古墳と同范鏡を持ち分けている熊本県船山古墳は、副葬品の多様さ華麗さもさることながら、古墳時代にあつては希有な絶対年代の手がかりを持っているので、この古墳を対比資料に選びたい。

船山古墳をはじめとする10基の同范鏡分有の古墳を、小林行雄博士は5世紀型の分有関係として把握しておられる(注19)。それではこの分有関係の中心をなすとみられる船山古墳は、5世紀のどのあたりに位置づけされるものであろうか。

船山古墳からは「治天下復□□□齒大王世一」と銀象眼のある有名な直刀が出土している。この銘はまた福山敏夫博士が嫂宮瑞齒別大王と解説されて、反正天皇を指すとされたことも世に知られた業績である(注20)。反正天皇は多くの学者によって倭の五王のうちの珍に比定され、宋書倭国伝の

記事によって、その治世は437年から443年の5カ年であると考えられている。

但しこの珍=反正する考えと、その絶対年代については若干の異論がある。例えば戦後間もなく発表された前田直典氏の論文によると、同氏は讚を応神天皇、珍を仁徳天皇と考え、応神天皇の崩年を430年としておられ(注21)、和島誠一氏は珍を反正天皇としながら、その在位を406-410年とされた(注22)。藤間生大氏は珍を反正天皇とする点では変りないが、在位を429-443年と14年間考えておられる(注23)。

年代のとびはなれた和島説を除くと、倭王珍の在位を5世紀前半の終り頃とみる点でこれ以外の各説も大体一致する。問題の太刀がこの在位中に鍛造されたとすると、墓に副葬された時期はこの年代及びその後とみてよい事になる。

三木文雄氏は仁徳陵を5世紀初頭とする学界の趨勢を前提に、5世紀と考えられる石人山古墳、石神山古墳及び6世紀初頭とみられる国造磐井の墓岩戸山古墳との対比によって、船山古墳の年代を5世紀後半と判断された(注24)。小林行雄博士も同様の対比から、船山古墳を5世紀後半と考えられ、5世紀前半にさかのぼることは不可能とされている(注25)。

さて船山古墳では馬具の轡が2組出土している。その一つは三連式の銜をもち、鉄環の鏡板をつけたもので、もう一つはf字形の鏡板をもち、引手が鏡板の外側で銜に連結する型式である。小野山節氏はこの2の轡は大陸の影響の強い馬具と認められ古墳時代馬具の第1期の遺物と考えておられる。小野山氏のいわれる第1期は5世紀、第2期は5世紀末から6世紀前半、第3期は6世紀後半、第4期は7世紀である(注26)。

船山古墳からは小形の環鈴が出土している。環鈴は馬具と共に出土する事もあり、そうでない場合もあって、殊に大形のものについては小野山節氏も、たしかに馬具として使用されていたことを示す例はまだ知られていないとされている(注27)。

環鈴については石山勲氏が全国の出土例をまとめ、鈴の径の大小を基礎にして形態の分類を行い5世紀型と6世紀型に編年された。船山古墳の環鈴は鈴の小さな小形品で、環の外縁に短かい柄をつけて鈴を連結する仲間である。石山氏の分類に従えば5世紀型に入る(注28)。

船山古墳は以上各氏の論考により、実年代を5世紀後半とみるのが妥当な線と考えられるのでこれを足がかりに、牛塚古墳の遺物を検討してみよう。

牛塚古墳の轡の鏡板は破損が著しく、f字形と明確に断定できないが、隋円形であれf字形であれ、第1期の鏡板とは異なりかなり大形化している。この点では船山古墳の鏡板に後行するものであるが、引手は鏡板の外側で銜に連結する。この形はともに5世紀に属する船山古墳、隋円形の鏡板をもつ大阪府長持山古墳の轡と同巧で、牛塚古墳の轡が上記2つの古墳の年代からあまり遠ざかったものでないことを示している。

牛塚古墳の剣菱形杏葉は通常f字形鏡板と組み合わせになって、第2期の特徴的な形態と考えられている(注29)。愛知県志段味大塚古墳の鈴杏葉、栃木県足利市十二天塚の鈴杏葉に類以している。これらはいずれも第2期の馬具である。

牛塚古墳の環鈴は、船山古墳の環鈴と違って柄のない喰い込み式で、しかも大形である。この点でも船山古墳に後行する型式の環鈴と考えられ、石山氏のいう6世紀型とみてよい。

船山古墳からは横矧板革綴の短甲と、鋌留の短甲が出土している。牛塚古墳の短甲は三角板鋌留の型式であって、馬具の型式と同様に船山古墳に後行する短甲と考えられる。

以上の点をまとめると、牛塚古墳は同范鏡分有の関係にある江田船山古墳とは同年代にならず、6世紀前半とみるのが妥当な線かと思われる。

2 牛塚古墳の墳形について

牛塚古墳が特異な形の前方後円墳であることは、すでに墳形の復元で説明した。従来前方部の短かい前方後円墳を帆立貝式とよんでいた。この形は円墳に低い方形の壇をつけたもので、奈良県河合村乙女山古墳、群馬県太田市女体山古墳はこの好例である。牛塚古墳は乙女山古墳、女体山古墳と異なり、一応前方部が後円部の半径の長さののびている。この点ではやはり短かい前方部をもつ群馬県赤城村茶臼山古墳と同じ形の古墳になるのかも知れないが、牛塚古墳の前方部は茶臼山古墳よりもやや長く、かつ幅も狭いので、帆立貝式とよんでよいかどうかやや躊躇を感ずる。

牛塚古墳と非常によく似た平面形をもつ古墳に、栃木県下都賀都壬生町の国指定史跡牛塚古墳があげられる。この古墳は巨石切石の石室をもつ国指定史跡車塚古墳の西側に隣接していて、周溝の一部が道路で切断されているほかは、墳丘も周溝もほぼ完全に残っている。墳丘は2段築成で、周溝は牛塚古墳と同様に円形につくられ、前方部の周溝が帆立貝式に短かい方形をなしている。細かい実測図がないのでなんともいえないが、これも恐らく同心円で企画された平面形を有する古墳であろう。

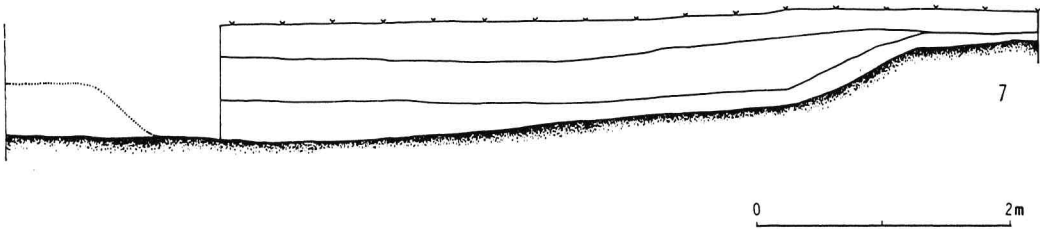
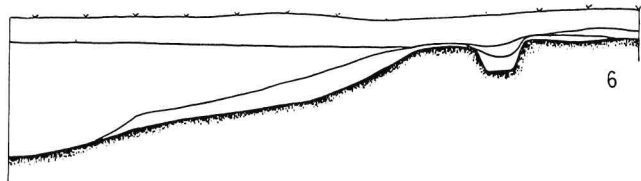
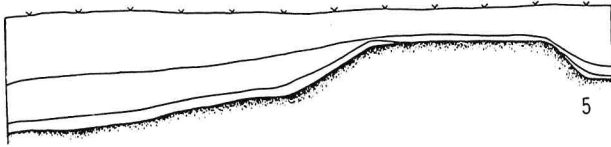
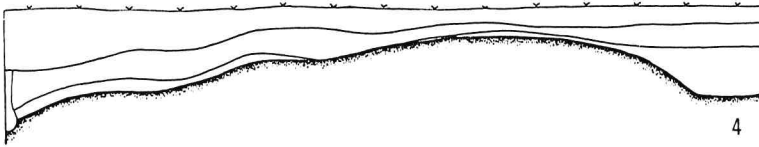
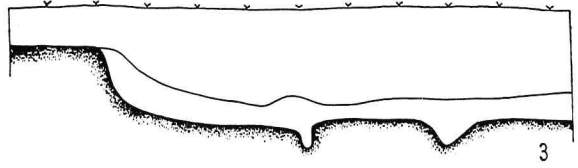
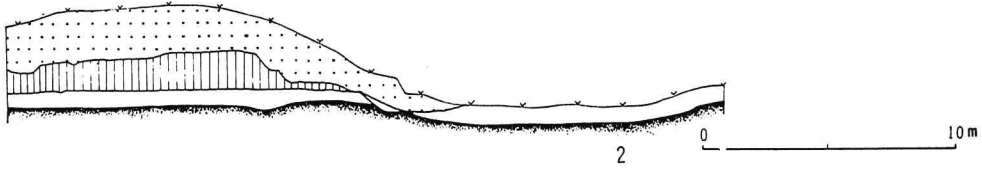
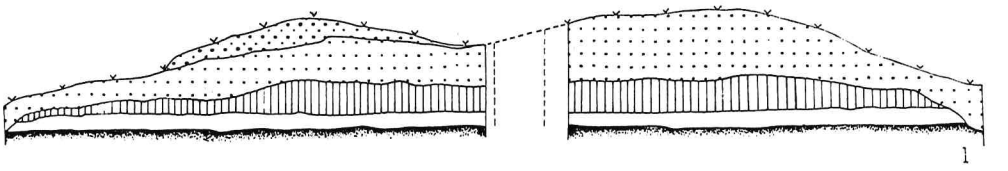
牛塚古墳は墳丘、周溝の平面形しか求めることができなかった。壬生牛塚古墳が牛塚古墳と同形態の前方後円墳であるとするならば、墳丘の立体的な推定を可能にしてくれる。壬生牛塚古墳は短かく且つ幅のあまり広くない前方部が後円部に接続していて、後円部との境が定かでない。後円部墳丘のゆるやかな斜傾がそのまま前方部前縁までだらだと下っていて、通常の前方後円墳にみられる前方部墳頂、接続部があまり明瞭でない。平面形でみると墳丘のくびれ部は一応指適できるから、前方部と後円部の長さは計測できる。長軸は凡そ53メートルで、前方部の長さは後円部の半径よりも短かいから、牛塚古墳よりも壬生牛塚古墳の方がより帆立貝式に近い平面形をもつわけである。

壬生牛塚型の前方後円墳は栃木県内にいくつか指適できる。同じ壬生町の藤井にある藤井古墳群の中の1基は全く壬生牛塚と同形で、この古墳は周囲に円筒埴輪がめぐらしてある。現在でも外形がよく観察できるのは、石橋町の石橋駅南にある前方後円墳である。南に前方部を向け、東北線の開通の折に長軸から西半分が切断されてしまったが、東半分はよく原形が残っていて、東側から見ると壬生牛塚型のなだらかな稜線がはっきりと分る。

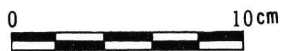
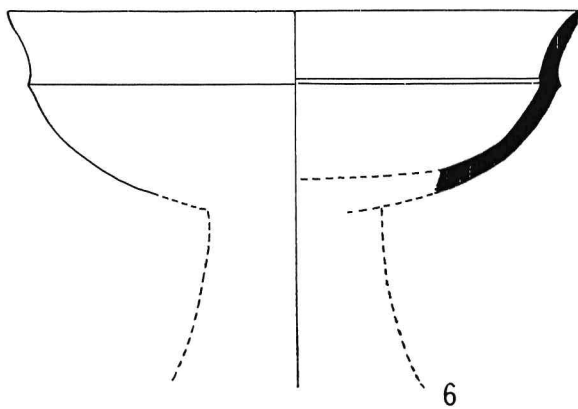
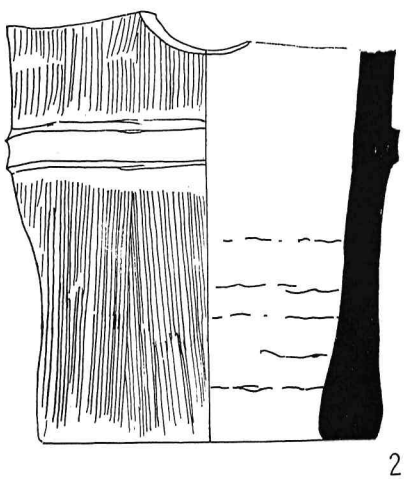
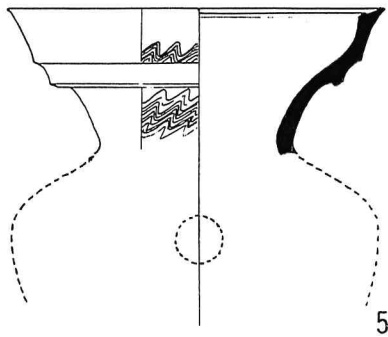
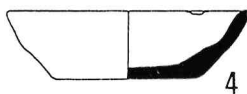
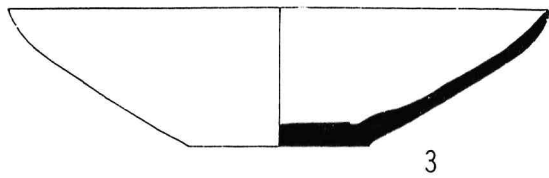
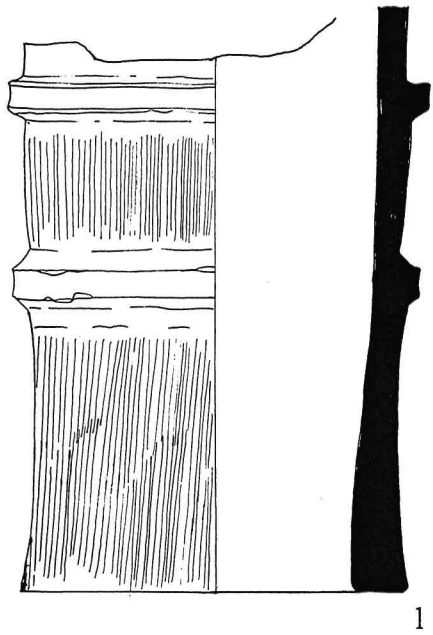
南河内村三王山にある三王山前方後円墳の陪塚とみられる南側の1群の古墳の中に、小形ではあるが、やはりこの形の前方向後円墳が1基ある。

壬生牛塚古墳をはじめいま例挙した異形の前方向後円墳は、いままで明確な発掘例がなく、どの時期に属するものであるか判断がつかなかった。今回雀宮牛塚古墳の発掘により、この形態の古墳のある一時期が押えられたわけである。

- 注1 清野謙次 日本人種論変遷史 昭19
- 2 下野史談1の4
- 3 上田宏範 前方後円墳 考古学講座(雄山閣)I所収 昭43
- 4 上田宏範 同上
- 5 上田宏範 同上
- 6 小林行雄 古鏡 昭40
- 7 西田守夫 神獸鏡の図像 ミュージラム 昭43
- 8 小林行雄 前掲書
- 9 西田守夫 前掲書
- 10 西田守夫氏のご教示による。
- 11 西田守夫氏のご教示による。
- 12 小野山 節 馬具と乗馬の風習 世界考古学大系3 昭34
- 13 小野山 節 同上
- 栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告2
- 14 石山 勲 環鈴の形態・年代と用途について 金鈴20 昭43
- 15 梅沢重昭 観音山古墳とその出土遺物 月刊文化財44年1月号
- 16 小林行雄 日本考古学概説 昭27
- 17 三木文雄 鈴鏡考 考古学雑誌30の1 昭15
- 18 後藤守一 漢式鏡 大15
- 19 小林行雄 注6に同じ
- 20 福山敏男 江田発掘大刀及び隅田八幡神社鏡の製作年代について
考古学雑誌24の1 昭9
- 21 前田直典 応神天皇という時代 オリエンタリカI 昭23
- 22 和島誠一 古墳文化の変質 岩波講座日本歴史2 昭37
- 23 藤間生大 倭の五王 昭43
- 24 三木文雄 船山古墳とその遺宝 ミュージラム
- 25 小林行雄 古墳時代の研究 昭36
- 26 小野山 節 注12に同じ
- 27 小野山 節 日本発見の初期の馬具 考古学雑誌52の1 昭41
- 28 石山 勲 注14に同じ
- 29 小野山 節 注12に同じ



第 3 图



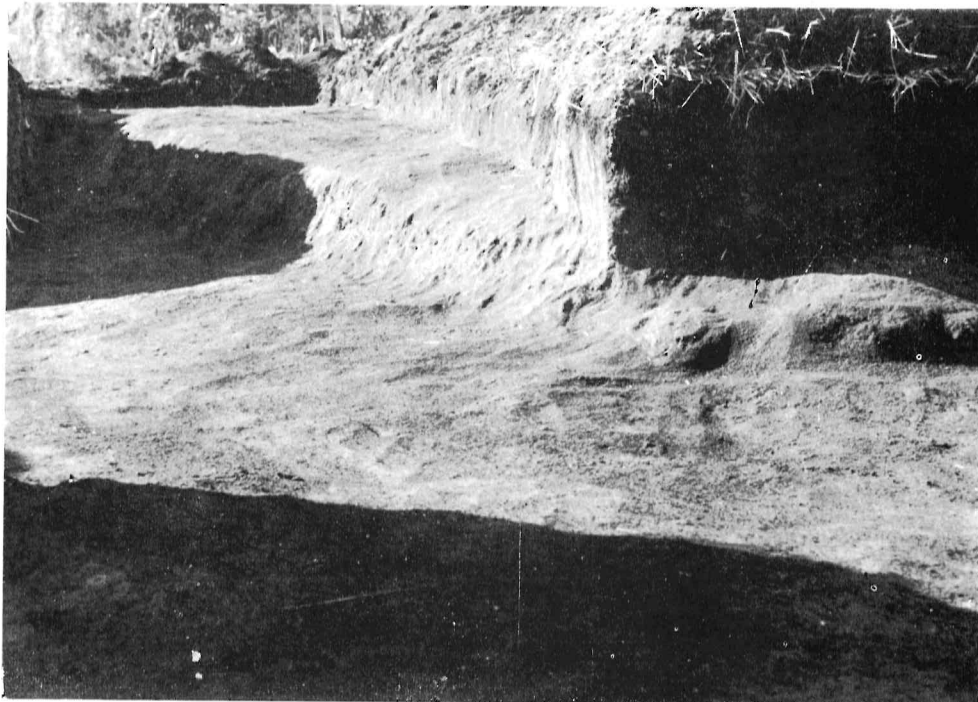
第 4 图



1 後門部発掘前の状況



2 後門部東西トレンチ



1 前方部東南隅角と周溝



2 前方部周溝東南隅角



1 面文帶四神四獸鏡



2 麥形獸文鏡



1 画文带神獸鏡部分



2 菱形神獸鏡部分

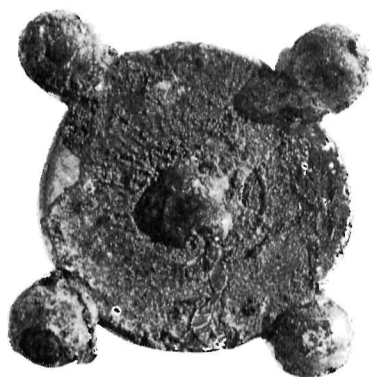
(縮尺不同)



1 五鈴五獸鏡



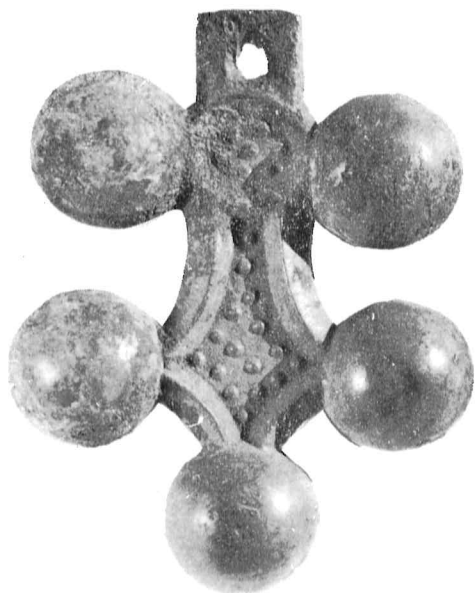
2 四鈴鏡



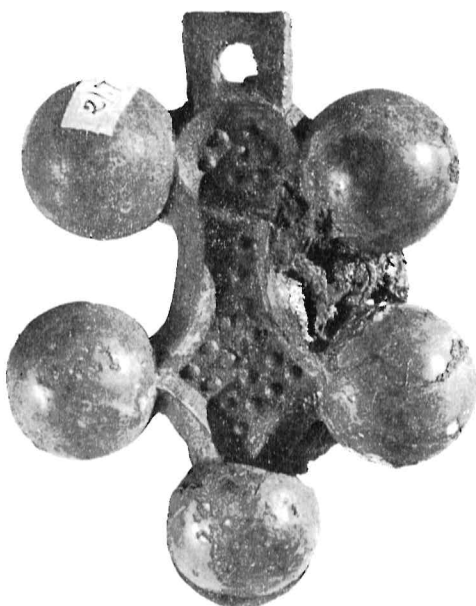
3 四鈴鏡



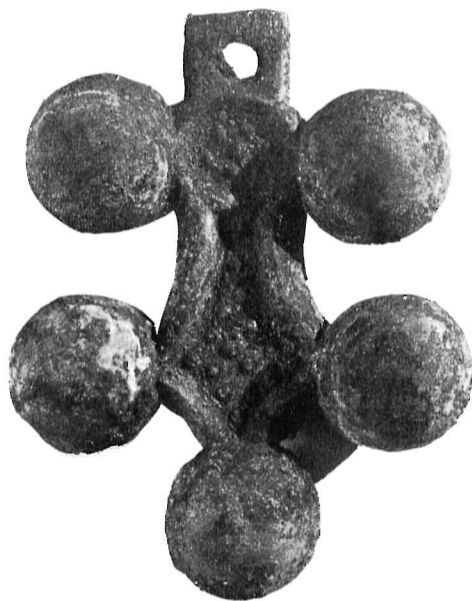
4 四鈴鏡



1



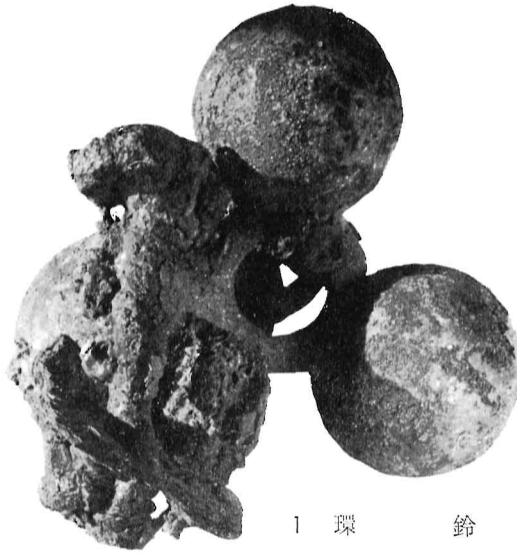
2



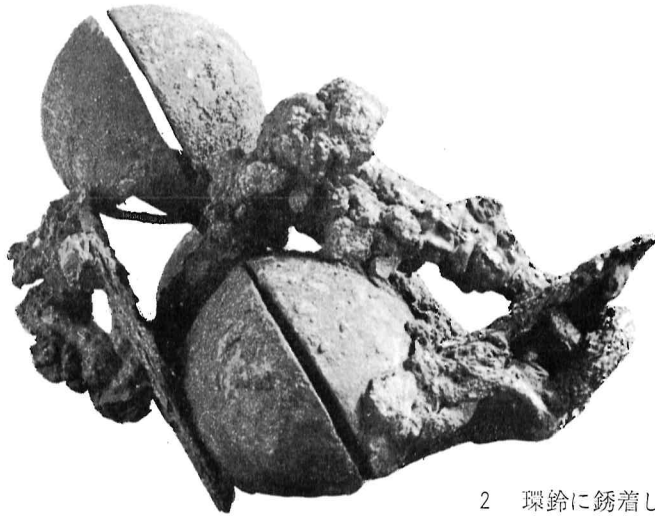
3

鈴 杏 架

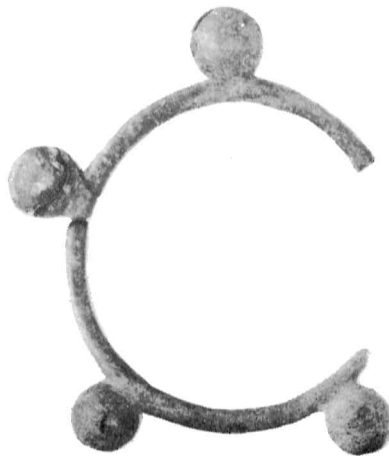
<図版七>



1 環 鈴



2 環鈴に銹着した髷



3 鈴 釧

(縮尺不同)



1 短 甲 片



2 短 甲 片



3 短 甲 片



4 短 甲 片



5 鉄 鍬



6 鉄 鍬



7 鉄 鍬



8 鉄金具片



9 直 刀 柄

(縮尺不同)

(再版)

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第1集

牛 塚 古 墳

— 昭和59年10月31日 —

著 者 大 和 久 震 平

発 行 宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

印 刷 (株)松井ピ・テ・オ印刷

※ 再版にあたって、表題を「雀宮牛塚古墳」から本市遺跡登録名称である「牛塚古墳」に改称した。

なお、牛塚古墳周辺遺跡分布図は再版にあたって挿入したものである。